

<http://outdoor.geocities.jp/tokinosunomori>

E-mail: tokinosunomori@yahoo.co.jp

<連絡先> 掛川市中宿 1 1 3 (TEL・FAX 0537-23-0412) 「森の駅 時ノ寿」(TEL 0537-28-0082)

<もくじ>

★ 初夏のご挨拶 「通信にご意見をお寄せ下さい」	2
★ 初夏行事案内 土壁塗りを体験しよう	3
草刈十字軍に参加しよう	3
森の音楽会で夏バテを癒そう	4
★ 活動報告・随想 (時ノ寿ブログより)	
2月14日「希望の森づくりパートナーシップ協定」	5
2月16日「山村文化をもう一度」	5
2月17日「山村文化を社会にアピールした日」	6
2月23日「NPO自立運営に向けて」	7
3月5日「森林再生のカギは？」	7
3月10日「2年目の3.11を前にして」	8
3月12日「忘れてはならない」	8
3月21日「いのちの森を持つ新病院が完成」	9
3月24日「1200人が森の防波堤で植樹」	10
4月3日「感謝と希望の植樹祭に500人」	10
4月8日「森の防波堤津づくり」	11
4月21日「原風景を未来に残そう」	11
4月27日「政策の先見性」	12
5月4日「雨中の草取り」	13
5月5日「7回目通常総会を終えて」	13
5月7日「浅蒸し煎茶を揉む」	14
5月19日「塩がつないだ山と海の交流」	14
5月20日「直向きな努力」	15
5月24日「山村に交流施設が誕生」	16
5月28日「都会の高齢者激増」	16
5月29日「夢・地道な努力」	17
6月1日「山村が都市を支える時代」	17
6月2日「世界農業遺産登録を山村再生に生かそう」	18
6月13日「セブンイレブン記念財団の地球温暖化対策」	19
6月18日「遠州灘沿岸に広がる森の防波堤づくり」	19
6月19日「震災復興の現地を見て」	20
6月25日「山村と都市が支え合う好事例」	20
6月28日「木質バイオマス時代」	21
6月25日「若者の感性」	22
6月28日「草刈り十字軍に参加しよう」	22

- ★ 別紙 ① 新聞記事「市民・行政・企業が団結した森林再生」4/30 付け毎日新聞
② 新聞記事「掛川の森で山村と都市が友好」6/23 付け中日新聞
③ 7～8月活動予定

<初夏のごあいさつ>

～ 「時ノ寿の森通信」へご意見をお寄せ下さい ～

2013 年も半年が過ぎてしまいました。これから梅雨末期の大雨、35℃を超える気温の上昇、台風・突風・竜巻など異常気象に伴う自然の脅威、さらには地球変動期に伴う東海・南海を震源域とする巨大地震など不安が高まります。東日本大震災や紀伊半島大水害など尊い犠牲による教訓を忘れることなく、家族や地域の絆に基づく防災対策を、日頃からしっかり実践しておいてください。

時ノ寿の森クラブは、4月27日の定期総会で承認された事業計画に基づき、市民・企業・行政と協働した「安心安全な都市づくりを目指す森づくり」を、源流域から海岸域までつながる社会運動として推進してまいります。昨今の社会の動きを見てみると、未来の安全安心に不安を感じる時があります。一人ができることには限りがありますが、時ノ寿の森クラブの森林再生活動に種々の形で参加することは、未来の子どもたちのための安全安心な国土づくりの第一歩ではないでしょうか。汗を流すこと、物心面で支援すること、木を利用することなど森林再生への参加は多様です。平成25年度も、どうぞ時ノ寿の森クラブをご支援下さい。

さて、時ノ寿の森通信も第28号を数えることが出来ました。会員の皆様に、時ノ寿の森クラブの活動をご理解していただきたく、年間数回発行してまいりました。また、インターネット上では、時ノ寿ブログを平成18年にスタートし、今も更新を続けています。文章力の不足やネタ切れで、読むに足りないブログですが、クラブの活動を振り返ったり、クラブの方向性を考える時には、大事な資料になると思っています。こんなブログですが、6月30日現在延べ107,207件のアクセスをいただいています。皆様からのアクセスのお陰で、ここまで続けてきたと思っています。今後とも、ご支援のアクセスをよろしくお願いいたします。インターネットを利用されない方も多いと思いますので、会員の皆様に共有していただきたいブログの内容を、本通信にも掲載しました。お読みいただき、皆様からご意見をいただければ大変うれしいです。

通信は、会員の皆様のコミュニケーションを図る大切な道具ですので、理事長の考えを一方通行でお伝えするだけでなく、多くの会員の皆様の声も掲載したいと思っています。次号は、9月下旬に発行する予定ですので、活動の感想や活動への希望、また会員の皆様の近況など、ぜひお寄せください。心からお待ちしています。

平成25年7月1日

理事長 松浦 成夫

土と出会うワークショップ

～伝統的木造構法による時ノ寿工房の壁塗りを体験して下さい！～

会員のみ 7月21日(日)

午前9時～午後4時

会員・一般 7月27日(土) 28日(日)

両日午前9時～午後4時

*汚れてもいい服装、運動靴、地下足袋、軍手、タオル、弁当



木舞掻きを体験する柴藤隆巳君

<トピック>

当クラブ会員の青野栄司さん(静岡市)が、来たる11月8～11日に京都で開催される第45回全国左官技能競技大会に東海ブロック代表として出場されます。頑張ってください。

「希望の森・草刈十字軍」に参加しよう！

～市民・企業・行政が協働による「希望の森育樹大作戦」～

昨年始まった市民・企業・行政が協働による「希望の森づくり」、すでに市内4カ所に総本数5万本が植えられています。苗木が自立するためには、4年くらいは雑草を抜いたり、下草を刈ったり、育樹する必要があります。市民・企業・行政が協働で「希望の森育樹大作戦」を行うため、「草刈り十字軍」を結成します。わがNPOは、リーダーですので、よろしく願います。炎天下での作業ですので、朝8時から2時間で終了します。

<第一弾> 日 時 8月 3日(土) 午前8時～午前10時 少雨決行
場 所 中東遠総合医療センター(菖蒲ヶ池地内)

<第二弾> 日 時 8月10日(土) 午前8時～午前10時 少雨決行
場 所 沖之須防災林(沖之須地内)

<第三弾> 日 時 8月11日(日) 午前8時～午前10時 少雨決行
場 所 浜野防災林(浜野地内)

～ 共通の留意点 ～

*持ち物 カマ又は草取り器具、水筒、軍手、タオル、帽子

*問合せ先 地理が不明、実施が不明な天候など気軽に問い合わせください。

NPO 法人時ノ寿の森クラブ事務局(松浦) 0537-23-0412

時ノ寿の森・夏まつり！

～森に響くコカリナの音が心身を癒してくれます～

時ノ寿の森は、クラブ活動のお陰で豊かに蘇りました。植物も小さな生物も、再生された森林で生命を謳歌しています。顔を撫でる森の風、手のひらを流れる谷川の冷水は、子供から大人まですべての者のDNAを研ぎ澄ましてくれるに違いありません。

今年の夏まつりは、コカリナ奏者を時ノ寿へ招き「森のミニ音楽会」を予定しています。日ごろの感謝を含め、クラブ員やご家族の皆様のお越しをお待ちしています。



<とき> 8月18日(日) 午前11時～午後3時 雨天決行(室内にて)
<ところ> 森の駅「時ノ寿」(電話) 0537-28-0028

<プログラム>

- ★ 森のミニ音楽会(午前11時から予定)
コカリナ奏者(米津絵美さんほか)演奏
- ★ 飲食満喫コーナー(午前11時30分から予定)
ビール・ソフトドリンク・焼そば・ピザほか
* 飲酒の方は車の運転は絶対にしないようにお願いします。
- ★ 自然満喫コーナー(自由)
森林散策・水遊び・虫取り・沢ガニ採り・昼寝・ぼんやりほか

<参加料>

大人1000円 子ども(4歳以上)500円

<参加申込>

準備の都合がありますので、7月31日(水)までに参加人数等を事務局(松浦)まで電話(23-0412)連絡ください。

<活動報告・随想> (時ノ寿ブログより)

2013年2月14日(木)

希望の森づくりパートナーシップ協定

社会では、男女間のコミュニケーションがオープンかつ積極的に行われるバレンタインデーのきょう、静岡県掛川市においては、「いのちを守る『希望の森づくり』プロジェクト」を市民・企業・行政の三者が協働して推進していること、「希望の森づくりパートナーシップ協定」が調印されました。

「いのちを守る『希望の森づくり』プロジェクト」とは、掛川市内で未来の子どもたちのために荒廃森林の再生活動をしている我がNPO法人時ノ寿の森クラブが、日本財団に認めら

れて助成をいただき、さらに掛川市及び袋井市と協働することによりスタートさせた「森づくりによる安全安心な都市づくり」のモデル事業です。市民のいのちを守るために、今こそ全市民の手によって森づくりをしてもらいたいとの願いから、掛川市内7か所に啓発塔としての「希望の森」（植樹総本数62000本）を造ります。

現在、掛川市の面積の半分を占める森林は、社会経済から見放されて荒廃していますが、あらゆる生物の生命の源泉とも言われる森林こそ、市民のいのちを守る大切な資源であり、公共財であると思います。近年の大災害を振り返り、森づくりを通して「いのちの尊さ」「森の大切さ」に気づいて欲しいと切望しています。

今日の調印式では、昨年10月27日に掛川市・袋井市の両市民3300人が参加して23000本を植樹した「中東遠総合医療センター・希望の森」を、行政（掛川市・袋井市）及びNPO法人時ノ寿の森クラブに、隣接企業3社（JX金属プレジジョンテクノロジー株式会社・タイコエレクトロニクスジャパン合同会社・立山紙工株式会社）が加わり、協働して育てて行こうと、相互に硬い意志を確約し合いました。

森づくりは、人間の赤ちゃんを育てることと同じです。苗木を植樹したら、4～5年は草取りなどの管理をしてやる必要があります。そのような意味において、本日のパートナーシップの成立は、62000本の「希望の森」を育てて行くリーダーであるNPOとしては、大変に心強く勇気づけられる素晴らしい出来事でした。パートナーシップの企業の皆様、未来の子どもたちのために末永くご支援をよろしくお願いいたします。



2013年2月16日(土)

山村文化をもう一度

かつて栄えた山村集落が、1軒減り2軒減り、昭和50年2月に最後の我が家が村を後にしてから38年の歳月が流れました。その山村集落跡「時ノ寿の森」では、現代社会に山村文化をもう一度生かそうとNPOの挑戦が続いています。



平成25年2月17日には、山村文化を社会の人々に広く知らしめ、かつ山村文化をいつでも、誰でも、気軽に体験し、現代文明では得られない価値観を得ることのできるビジターセンター的な施設が上棟します。

時ノ寿の森クラブは、3年前にNPO法人になった小さな組織ですが、夢は「未来の子どもたちに豊かな森を残し、その森の恵みが誰でも身近に享受できる地域社会をつくる」ということです。趣旨に賛同する仲間を市内外から集め、まずはふるさとの荒廃した森林を豊かな状態に「目に見えるようにすること」だと思い、ひたすら無償の汗によって荒廃する森林の間伐を行い（平成25年2月現在160ha）、再生をして来しました。

現場で汗をかくこと、遠くからエールを送ることなど多種多様な森林再生へのご支援をしてくれたクラブ員（平成25年2月現在142名）に感謝をします。しかし、膨大にかつ急速に広がる荒廃森林の間伐し続け、さらに再生された森林を保全管理して行くためには、広く社会全体が森林と共生することであると確信します。かつて、森林と共生してきた「山村文化」を、現代社会の人々がもう一度見直すことが大切であると思います。

わがNPOは、そのような大きな目標を描き、廃村集落の一角を土地所有者から借用し、(仮称)「山村文化体感ビジターセンター・時ノ寿の森工房」を建築します。写真は、16日土曜日建前風景です。厳しい寒さの中での建築作業でしたが、糸田棟梁ほか二人の大工さんの匠の技に、13名のクラブ員の夢実現に向けたエネルギーが加わり、伝統的木造構法による重厚な柱・梁による立派な骨組みが無事にできました。

2013年2月17日(日)

山村文化を社会にアピールした日

きょうは、時ノ寿の森クラブにとって、活動が社会に認められた最高の日であったのではないかと、感無量です。これまでの時ノ寿の森クラブの森林再生活動が、きょう午前中の静岡第一テレビの特別番組「いのちの森を育てる～山村文化をもう一度～」(30分間)により、活動理念のほか会員たちの満足げな姿を映像で映し出してくれました。このテレビ放送への反応は凄いものでした。会員たちや私の携帯電話には、多くの激励と共感のメッセージが寄せられました。そして、時ノ寿の森クラブのホームページのアクセス数は、日曜にもかかわらず今日だけで100件を超えました。(通常週末休日のアクセス数は40件くらい)



このような状況の中で、きょうは時ノ寿の森クラブのメンバーハウス兼ビジターセンターの機能を持つ「時ノ寿工房」が、時ノ寿の森の玄関口に伝統木造構法によって上棟しました。建前作業は、匠の職人3人に10数名のクラブ員が加わっての見事な建前作業風景でした。匠の三人は、素晴らしい技術をひけらかすことなく、素人のクラブ員と上手にコラボレーションしてくれました。

祝餅投げに参加してくれた会員をはじめ、地元住民の皆さんも、手前味噌ですが、地元木材を中心の重厚な梁や柱によって組み立てられた工房建築にとっても満足感を抱いていただ

けたものと思っています。

今後とも、NPO法人時ノ寿の森クラブに御支援ご協力をよろしくお願いたします。本日の（仮称）「山村文化体験ビジターセンター・時ノ寿の森工房」の建前作業の無事上棟を心から喜びたいと思います。

2013年2月23日(土)

NPO自立運営に向けて

NPOとは無償のボランティア活動をする団体であると思っている市民も大勢いるでしょう。そんな低次元な理解により、NPOに業務を委託している行政事例が少なくないのが現実です。

わがNPO法人も、森林再生という目的を達成するため、荒廃森林の間伐事業や広葉樹の植樹事業を実施していますが、その事業費は公的資金の助成を受けています。しかし、その事業費の中には、一般企業では当然に計上されている諸経費（分かりやすく言えば会社の間接的な経費や利益のこと）は認められないため、計上されていません。我が国では、まだ公的資金によってNPOに事業を委託したり、事業費を助成する場合は、NPO法人が組織運営（言い換えれば経営）して行くために必要な「フルコスト」が認められていないのが実態です。これでは、NPO法人が活発に事業を実施しても、組織自体に体力はついて行きません。体力がついて行かないどころか、事業を実施すればするほど、無償で活動する会員たちは疲弊してしまい、気が付いたら活動しているのは役員だけだった、なんていうことにもなりかねません。



私たちのNPO法人の活動目的は、森林の生産価値が低下してしまったため、所有者が保全管理を放棄してしまっている民有林を、NPO法人が所有者に代わって保全管理し、再生して行こうというものです。生産価値は低下しても、防災や環境など国土保全上における森林の公益的価値は、低下するどころか高まっています。

このように、現代社会にとっても未来にとっても重要な森林ですので、NPO法人としては目の前の荒廃森林の保全活動をすると同時に、この活動を持続可能にするための基盤整備をすることが、大変重要な課題です。今、わがNPO法人は、名古屋の立派なNPO法人である「市民フォーラム21」の支援を得て、コンサルティングを受けています。昨日もコンサルティングを受けましたが、これだけ大規模な事業を実施するNPO法人であるので、活動を持続可能にするためには、まず今の理事長兼事務局長兼事務員の非常勤体制を常勤体制にすることです、と言われてしまいました。1年くらいの中に、色々検討をしていきたいと思っています。

2013年3月5日(火)

森林再生のカギは？

日本の人口は2060年には9000万人を割り込むというショッキングなデータがあるが、世界が経験したことのない超人口減少時代に我が国は突き進んでいる。加えて、

世界ナンバーワンの長寿社会を迎えているということは、これから半世紀の人口構造は超高齢社会なのである。

これらの現象を念頭に入れて未来を展望しなければならないのだが、基本は身の回りにある地域資源を、あらゆる視点から社会に活かすことを研究すること。そして、森林の場合は地産地消ではなく、地産外消であると思う。また、森林と言えば大抵は男性目線で考えがちだが、これも女性目線で森林の活かし方を考えてみるのが大事だ。

このキーワードで、森林資源が、どうすれば、どういう物になれば、女性が喜んで買ってきて、また森林を闊歩してくれるかを徹底的に考えてみることにしよう。



2013年3月10日(日)

2年目の3.11を前にして

東日本大震災2年目を前にして、私たちは、あらためて被災地に対する支援の仕方を真剣に考えるとともに、地震国ニッポンに住む民として巨大地震に対する備えを真剣に考える時であると思います。

メディアが伝える東日本大震災での被災直後の状況を見ると、文明の力のひ弱さを感じてしまいます。食料品も燃料も、いつでも、どこでも、だれでも身近に簡単に購入できるという現代社会の仕組みに、慣れ親しんでしまっている私たちの生活スタイルは、物流システムが大災害によって絶たれたら、どこでも・だれでもが孤立してしまうということが分かりました。

私たちは、東日本大震災2年目を迎えるに当たり、日本の山村生活の基本である伝統



的な食糧・燃料の備蓄を見直すことが、とても大事であると痛感します。時ノ寿の森クラブは、木と共生する伝統的な山村文化が、現代社会でも価値があると訴えてきましたが、大災害への備えを考えると、そのことは大いに有効な方策だと思っています。

時ノ寿の森クラブが、粛々と継承している再生可能エネルギーの代表である「薪」「木炭」を、大災害の燃料として備蓄しておくべきだと、社会や行政に訴えて行きたいと思っています。

2013年3月12日(火)

忘れてはならない

東日本大震災から2年目の昨日、被災地の多くの方々の言葉に強く感銘をしました。「私はあの日より、少しだけ強くなりました。」と、最愛のお母さんを失った悲しい現実葛藤しながら、謙虚な中にも未来に向かって力強く生きていこうとしている岩手県宮古市の

山根りん（18歳）さんの言葉は、東日本大震災の尊い教訓を忘れないでと、私たちに言っているようでした。「私が自分らしく生きていることが母に対する一番の恩返しだと思っています」「助かったからには、生きて人の役に立つことが自分の使命だと考え」「東日本大震災がつらい記憶でなく、未来につながる記憶となるよう、被災地から私たち若い世代が行動して行きます。」

これらの彼女の言葉を聞いていたら、この2年間の自分の言動が恥ずかしくなっていました。

小さな地震列島です。どこに住んでいても、大津波や火砕流に、大洪水や土石流に襲われるかもしれません。そして、その小さな国土には54基もの原子力発電所があり、その原子力発電所には行き場のない大量の使用済み核廃棄物が溜まり続けているのです。私達は、2年という月日の流れる間に、これらの現実から目が遠ざかっていることはないだろうか、強く反省してしまいました。

多くの被災者の真摯な言葉を胸に置き、私たちも、今日から未来の子どもたちのために、生き方や考えた方を転換しなければならないと思いました。



2013年3月21日(木)

「いのちの森」を持つ新病院が完成

全国初の自治体病院が統合する新病院が、6年の歳月をかけて3月21日静岡県掛川市に完成しました。病院の名前は、二つの自治体病院のある掛川市と袋井市を含む静岡県の中東遠地域の人口30万人の医療を担う基幹病院であることから「中東遠総合医療センター」と名づけられています。病院の診療が開始される開院日は5月1日です。

21日には、多くの関係者が集まり、多くの苦難を乗り越えて完成した新病院を祝う竣工式が行われました。地域住民が安心して地域に暮らすためには、信頼できる病院が身近にあることが大切ですが、信頼できる医師を各診療科に確保して病院を運営して行くため

には、自治体間で競争し合っている、日本の限られた医師数では実現できません。そういう意味において、掛川市・袋井市両市民の選択は、歴史に残る英断であったと未来の人に評価されるのではないのでしょうか。

そのような立派な新病院が誕生しますが、誰も人間は、願わくば病院にはかかりたくないと思っています。そして、自分自身の体が持っている自然治癒力というものもあると思います。したがって、日常から健康な心身を維持する努力が大切で、万一その健康を崩した時には、早



く信頼する病院で診てもらい、診断と治療を受けることです。

そして、もう一つ大事なことは、病院の医療を受けると同時に、自分自身の持っている病気に対する治癒力をしっかりと発揮させることです。新しくできる病院には、そのための「いのちの森」があります。昨年10月27日に、両市民3300人が集まり、27種類23000本の土地本体の広葉樹を植樹しました。皆さんが植えてくれた苗木は、厳寒の冬を

耐え、春を待っています。どうぞ、健康な時でも「中東遠総合医療センター」にある「いのちの森」を歩きに来て下さい。

2013年3月23日(土)

1200人が森の防波堤で植樹

23日土曜日、静岡県掛川市沖之須地区に市内外から1200人が集まり、潜在自然植生の広葉樹21種類9000本の植樹を行いました。私たち時ノ寿の森クラブと海岸防災林保護組合、掛川市が主催し、毎日新聞社が共催した市民と行政が協働による森づくりに、日本財団が大きな財政的支援をしてくれたため、この大植樹祭が実現しました。また、市内外のたくさんの企業からも、この植樹祭を資金面や社員参加など幅広く物心両面から多大なご支援を頂きました。まさに市民・企業・行政が協働した「安全安心な都市づくりを目指した植樹祭」になりました。晴天に恵まれた250mの防災林に1200人が広がった風景は、本当に壮観でした。参加者の中にはのぼり旗を持った方が何人もいましたので、戦国時代の戦の映画でも見ているようでした。多くのご参加いただいた参加者、応援隊の皆様、またご支援いただいた団体の皆様に、まずは御礼申し上げます。ありがとうございました。



明日は、掛川市立総合病院において、感謝と希望の植樹祭が、今日と同じ午前10時から開催します。今日ご参加できなかった方は、ぜひ明日ご参加ください。

2013年3月24日(日)

感謝と希望の植樹祭に500人

昨日の「森の防波堤づくり植樹祭」に続き、24日の今日は、掛川市立総合病院の敷地において、同病院が4月末で役目を終えて新たな保健・福祉・医療の総合拠点「希望の丘」に生まれ変わるのを記念して、同病院への感謝と跡地施設への期待を込めた「感謝と希望の植樹祭」が開催されました。



心配された天気も穏やかな日和となり、市内外から大勢の参加者が来てくれまして、スタッフを含めれば総勢約500人の大植樹祭となりました。この植樹祭の共催者であります掛川市からは松井市長さんをはじめ幹部の皆さんが、また毎日新聞社からは選抜甲子園大会真っ最中にもかかわらず朝比奈社長が駆けつけて下さり、同社ヘリコプターも

応援に飛来してくれました。また、植樹する場所には障害者が利用する施設が建設されるため、重度障害をお持ちの方などたくさんの障害者も参加してくれました。

このように、子どもから障害の方まで、また青年から高齢の方まで、さらには県外からも大勢の方が駆けつけてくれました。タイトルのとおりの「感謝と希望の植樹祭」と

なり、この事業を助成してくれている日本財団の目的「安全安心な都市づくりを目指した森づくり」になったと確信しています。

静岡県掛川市で開催した二日間で述べ10,800本の大植樹祭を表裏一体で支えて下さった市職員・病院職員の皆様、また民間企業の皆様、そしてわが時ノ寿の森クラブのメンバーに心から感謝を申し上げます。

「いのちを守る『希望の森づくり』プロジェクト」による、次回の第5弾「植樹祭」は、9月30日（月）に掛川市立大浜中学校において開催します。今後とも御支援とご協力をよろしくおお願いいたします。

2013年3月30日(土)

森の防波堤づくり



先週土曜日は、掛川市沖之須地区において、松枯れでハゲ山になっている海岸防災林を守っていかうと、「いのちを守る『森の防波堤づくり』植樹祭」を開催したところ、市内外からの1200人の方々が参加してくれました。

巨大地震の脅威は、世界一の地震国である小さな国土の我が国においては、都市も地方も、山間地も海岸地域もどこの住民も、我が身を守る備えが必要だと思います。

そういう意味において、30日の土曜日に、掛川市浜野地区で開催された、地域住民の手による、地域住民のいのちを守るための「森の防波堤づくり植樹祭」は、市内外に対してモデルとなる素晴らしい住民運動であると思います。

写真は、戦時中に軍が軍需工場を造るため、地域の防災林の丘を切り通しにしたが、今は切通しが何の役にも立ってなくて、現在はこの切通しが、地域住民に巨大津波の脅威をもたらしていました。それを、地域住民が、行政の力も借りて自ら埋め戻して、そこに植樹をしたのです。

2013年4月3日(水)

原風景を未来に残そう

私たち時ノ寿の森クラブは、8年前からふるさとの原風景である静物多様性に富んだ豊かな森林を、本来の姿のまま未来に継承してやりたいと思い、荒廃の著しい森林の再生に取り組んでいます。狭い国土ではありますが、周囲が海に囲まれ、そして四季の変化に富んだ気候の中で育まれた自然は、世界に誇れる日本固有の貴重な財産であると思います。静岡県掛川市の山間地では、豊かな森林と森林から流れる清流が原風景であるならば、日本一の湖を背後に持った近江八幡市には、まったく異なる原風景がありました。



先日、滋賀県方面に出掛け、近江八幡市を訪ねる機会を得ました。写真家の今森光彦

さんが長年撮影された琵琶湖周辺を写真集を見るたびに、一度その地を訪れてみたいと思っていましたが、その地域の一部である近江八幡市ですが、写真で見る以上に素晴らしい景色が、そして文化が残っていました。昨日のブログで使用した写真も、その一部です。

近江八幡市には、そこかしこの家々に、伝統的な杉板材を使った壁、また地場産の本瓦葺などなど、歴史や文化を大切にされている市民性があふれていました。そして、そのような伝統を重んじられた街並みの中に、近江商人の地で古くから栄えて現代にも立派に継承されている和菓子老舗や製菓老舗が、モダンな建築物で客があふれんばかりの商いがされているのです。いい街づくりを見ました。

私たち時ノ寿の森も、これほどたくさんの方が集まらなくてもいいので、いのちを育むふるさとの森林が、市民にこよなく愛され、森や谷川を縫う小路を市民が行き交うようになったらいいなあ。森林再生が楽しくなりました。

2013年4月8日(月)

政策の先見性

きょうの新聞でとても興味深い論説を読みました。題字は「都会と田舎は逆転する」でしたが、その執筆者は毎日新聞の山田孝男さんです。山田さんは、先月に国立社会保障人口問題研究所が公表した2040年の地域別推計人口の数値で、都道府県別の高齢者増加率が目を引いたとし、高齢者は概して大都市で激増し、田舎は安定の傾向を示していると言われています。例として、2010年を基準にした65歳以上の増加率を上げていますが、神奈川県は60%で東京都も54%であるのに比べて島根県はマイナス2%だそうです。



この違いが意味しているものは何かと、政策研究大学院大名誉教授・松谷明彦氏が著書で言っている面白い一節を引き出されていました。「これまで地方が抱えていた問題に大都市はこれから直面します。都会に行けば働き口があるという時代は終わり、地方へ人が逆流する可能性がある」……。

人口動態を数字的に見通せば、そうなるのでしょうか。山田さんも、高度成長時代に田舎から押し寄せた、おびたらしい若者たちが老いるのだから、都会の高齢者が激増するのは当然だと言っています。

今年の4月は、各地の自治体で首長や議員の選挙が予定されています。わが掛川市でも同様に、今月下旬に予定されています。地方が元気を出していくためには、市民を率いる首長や議員は、時代の方向性をしっかりと見通し、未来のために市民挙げて何をやるべきかを、若い世代を説得できる洞察力のある政策が必要だと思います。

2013年4月21日(日)

雨中の草取り

朝から強い雨模様で屋外の行事には鬱陶しい天気の様子。しかし、植樹内の草取りには最適な天気です。クラブ予定表では、雨天決行になっている定例活動日です。わがクラブ会員たちの気持ちは、迷った方が多かったと思います。日曜日、雨音を聞きながらの寝床もいいものです。しかし、わがクラブが昨年6月2日に主催し、14000人も参加者を迎えて15500本



を植樹した市内海岸部の防災林も、どうなっているか少し気に掛かるのも事実だと思います。そのような葛藤を経て、草取り作業に私以外に8人も、浜野防災林に来てくれました。このことだけ見ても、わが時ノ寿の森クラブ会員は、7年前に始まった当時と比べたら、会員の皆さんは随分と社会貢献への意識が高まったと思います。

5000㎡、15500本の植樹エリアを9人で草取りするのは、楽ではありません。春の陽気に誘われて植樹地一面に草が生い茂っていました。そして、大根程もありそうな太い根を地中深くおろしていました。根っこを草の根でからめられている苗木たちは、苦しそうでした。少し人間の手を掛けてやる必要があります。

雨にも負けず、風にも負けず、会員たちは一生懸命草取りをしてくれました。きっと、苗木も喜んでいることでしょう。この結果は、これから新緑シーズンの5月、6月に出るに違いありません。厳しい環境下の苗木は、種類によっては全滅的なものもありました。一方、マサキ、ウバメガシ、シャリンバイなどは新緑の葉っぱを雨に濡らしながら、草を取ってやっただけで、もう一回り大きくなったようでした。

海岸地域の環境は、苗木にとっては大変厳しいものです。植えてから3～4年は、私達人間がしっかりと支えてやりたいものです。わがクラブ会員だけでは、手に負えませんので、企業や地域、そして広く社会に発信して、応援団を集めたいと思います。

2013年4月27日(土)

7回目通常総会を終えて



27日、時ノ寿の森クラブ通算7回目、NPO設立後3回目の通常総会が開催されました。時ノ寿の森クラブが、これから未来に向けて社会の課題「森林再生」を解決する活動を持続していく上で、歴史に残る2012年度の事業成果であったと思います。総会では、1年間の事業実績の大きさに会員相互あらためて驚きながら、これからの活動への責任を感じつつ事業報告と収支決算が承認されました。また、前年度の大きな成果と新たな動きを踏まえ、さらなる発展を目指しつつ2013

年度事業計画案及び収支予算案が議決されました。

小さなNPO法人が「未来の子どもたちに、ふるさとの森林を豊かな姿で引き継ぐ」

という大きなミッションを達成するためには、一歩ずつ立ち止まることなく、広大な荒廃森林を再生して行かなければなりません。そのためには、活動に必要な資源（人材や資金等）をいかに持続的に獲得して行くかが、大きな課題です。

今年の通常総会では、前年度の成果と新たな動きを基盤とし、森林再生の実践と社会啓発活動を並行して進めるとともに、さらにその活動が持続するために組織の経営力向上のための研究検討を進めることも確認されました。

時ノ寿の森クラブの活動理念である「近者悦ばば 遠者来る」を実践して行くためにも、NPO法人としての社会的責任も合わせて果たしていくことが重要であると自覚を新たにしました。

2013年5月4日(土)

浅蒸し煎茶を揉む

今日は、朝から自分の好きな茶づくりに1日中没頭していました。趣味とはいえ茶づくりを始めてから今年で15年目になりますが、自然相手の茶づくりはまさに毎年が1年生です。今年も、昨日書いたように厳しい気候変動によって、成長した茶葉の品質は一つの茶畑であっても均一ではなく、ムラがありました。そんな、茶葉を蒸して、煎茶に揉み上げるのは、とても緊張します。毎年のように、初めて揉む時は、今年の茶葉の状態を予想しながら、揉み上げて行く過程で、微妙な変化があるのです。今年の茶葉は、3月の高温の後で4月の低温に叩かれているのですが、揉んでみるとやはり違いがありました。



茶づくりには奥行きのある深い妙味があるので、私にとって「茶づくり」は、何物にも代えがたい道楽と言えます。茶づくりは、朝早くから夜遅くまで、そして三度の飯までそっちのけで没頭させてくれます。

今夜、先ほど出来あがった荒茶は、今月下旬に火入れ仕上げをして完成します。まあまあの出来だと思います。完全無農薬、完全有機肥料で栽培した茶葉を、流行りの深蒸しとは異なり「浅蒸し」で揉んだ煎茶です。日本の煎茶の独特の香り、渋み、甘みが大事です。

2013年5月5日(日)

塩がつないだ山と海の交流

時ノ寿の森のある山村で、かつて栄えてきた大沢集落は、我が国の経済成長とは裏腹に、いくつかの理由が複合的に絡みあつてのことでしょうが、昭和50年に廃村してしまいました。この山村がかつて栄えていたころ、今から70年ほど前（太平洋戦争末期～終戦直後）、社会に物資が窮乏し



ていた時代に、山村の人々は大須賀海岸（現在の掛川市沖之須地区）に出かけて行き、民家の協力を得て数日泊まり込み、塩づくりをし、出来あがった塩を山村に持ち帰ったという歴史があったのです。現代にも通じる、塩が結んだ「素晴らしいつながり」ではないでしょうか。

今日は、そんな先人たちのつながりのある「時ノ寿の森（大沢集落跡）」に、掛川市沖之須地区で海水からの「塩づくり」を現代にも伝えて行こうと取り組んでいる「沖ちゃん塩」のメンバーたち約10名が、訪ねて来てくれました。まさに、塩がつないでくれた「70年ぶりの交流」です。

一行は、市内にこれほどの山間地があったのかと、初めて知ったようでしたが、保全された森林に囲まれた山村の環境の素晴らしさも初体験し、その心地よさに感動もしてくれました。また、森林再生活動（特に杉檜林の間伐）によって発生する材木が、林内のあちらこちらに残っている事に、強く興味を持ったようでした。なぜなら、彼等は、海岸部で塩づくりをするときには大きな釜で海水を煮詰めるため、その燃料として間伐材を活かしたいとの思いがあったのです。間伐材を燃料にした「塩づくり」が実現すれば、まさに山と海の手ながりによる地域づくりです。今日は、その第一歩です。

2013年5月7日(火)

直向きな努力

一昨日、国民的ヒーローのお二人・長嶋茂雄さんと松井秀樹さんが国民栄誉賞を受賞されました。激動と発展の昭和の時代の中で天才的なプレーで国民を鼓舞した長嶋さん、一方その長嶋さんに憧れながらも低成長社会に向かう平成の時代の中で、直向きな努力によって野球発祥の地アメリカで頂点に立ち、努力は必ず報いられることを国民に証明してくれた松井さん、パフォーマンスは異なるろうとも、多くの国民を共感させたその生き方はまさに国民栄誉賞に値すると思います。



お二人の生き方を見ながら歩んできた私も、今年中に還暦を迎えます。少年時代は、長嶋選手にあこがれたこともありましたが、年齢を重ねて行くうちにいつしか、控えめなパフォーマンスの中に目標を目指す直向きな努力の姿が映る松井選手に熱く共感し、目先のことよりも高い望みを心に秘めて直向きに努力することをモットーにしていました。

しかし、一昨日の受賞されたときの松井さんのコメントを聞きながら、まだまだ自分のような生き方は直向きな努力とは到底言えるものではなく、見栄や欲望が目の前にちらつくこの頃の自らの生き様に反省しました。

「努力は必ず報いられる」「初心忘るべからず」

2013年5月19日(日)

山村に交流施設が誕生

時ノ寿の森クラブは、会員自らが森林を楽しみ、その森林が未来の子どもたちにも豊かな状態で引き継がれて行くための活動をしています。活動の第一は、所有者による手入れが放棄されて荒廃している人工林を間伐し、その間伐材を社会に有効利用させることです。第二は、間伐した林内に広葉樹を植えて森林に多様性を助長して森林と共生する生物を増やし、ひいては森林に保水力を高めて谷川の清流を増やすことです。

第三は、第一及び第二の活動によって豊かな状態に再生された市内の身近な森林を、多くの市民に紹介して実際に森林の多くの恵みを実際に体感してもらうことです。

そのような森林再生活動を、会員をはじめ多くの人々に知ってもらうため、このたび時ノ寿の森クラブでは、静岡県掛川市倉真地内の「時ノ寿の森」に森林を好きな人に気軽に訪ねて来てもらいたいとの願いから、時ノ寿の森に交流施設を建築しています。この建築工事は、大工や左官などのプロの職人の技を、会員が実際の作業を通じて学ぼうという手法で進めています。今日も、朝から会員14人が集まり、左官職人の会員Tさんから土壁の下地の小舞掻きを行いました。

日本の伝統的な土壁づくりを会員自らが体験するのですが、ほとんどの会員が初めて経験するというほど、現代では本格的な小舞土壁づくりは行われていません。

来春完成を目指した山村交流施設ですが、会員の手で一步ずつ出来あがっていくのが楽しみです。会員はもちろんですが、日本の伝統木造工法の家づくりに興味のある方はぜひ時ノ寿の森に来て下さい。



2013年5月20日(月)

都会の高齢者激増



先月8日のブログの中で、国立社会保障人口問題研究所が公表した2040年の地域別推計人口の数値に注目すべきだということを書きました。我が国の人口は減少時代に突入したことは誰もが承知で、どんな産業においても人口動態は重要な経営指針です。

あらためて都道府県別の高齢者増加率を見てみましたが、高齢者は大都市において激増し、田舎は安定の傾向を示している事が解りました。以前のブログでも書きましたが、2010年を基準にした2040年にお

ける 65 歳以上の増加率は、神奈川県は 60% で東京都も 54% であるのに比べて島根県はマイナス 2% だそうです。これはどういうことか言えば、今地方都市が抱えている高齢者対策、中でも不足に陥っている介護施設等の問題は深刻ですが、これからは大都市が同様な大問題に直面するという事です。

かつて、右肩上がりの高度成長期は、誰もが幸福を都会に求めて村を離れて行きましたが、これから 30 年間は山村に幸福を求めて都会を離れると言った逆転現象が起きる可能性は大いにあります。山村の持っているあらゆるポテンシャルを上手く活用すれば、大都市と山村の交流により森林保全が図れるかもしれません。森林で研ぎ澄まされた感性を全開にして、都会人が求めているものを考えてみよう。写真は、廃村集落跡に建築中の仮称「山村交流ビジターセンター・時ノ寿工房」です。

2013 年 5 月 24 日(金)

夢・地道な努力



冒険家三浦雄一郎さん、世界最高齢 80 歳での世界最高峰エベレスト登頂おめでとうございます。65 歳から 5 年ごとに大きな目標を立て、その目標達成の為に健康管理やトレーニングをはじめ多くの準備を、用意周到に取り組んで来られ、70 歳、75 歳、80 歳と世界最高峰に立たれてきた三浦さんは、我が国の高齢社会、経済至上主義社会の今日に、強いメッセージを発してくれたと思います。

三浦さんが長い地道な努力の取り組みの末に目標を達成された同日、時あたかも我が国の株価市場は大暴落していました。政府と日銀の強烈な主導により、急激な円安、株価高騰が進んでいた昨今の日本経済のあり方に、大きな疑問と矛盾を感じていたのは私だけでしょうか。

我が国の社会は、今猛烈な速さで高齢化、人口減少、価値観多様化、効率主義が進んでいます。一方で世界では地球温暖化と人口膨大が爆発的に進んでいます。私たちは、三浦雄一郎さんが偉業を達成されたことと、マネーゲームによって起きた株価暴落が奇しくも同日に起きたことを、あらためて考えたいと思いました。

2013 年 5 月 28 日(火)

山村が都市を支える時代

今まで山村は人口の減少により、限界集落などと呼ばれる存続が危ぶまれる状態に陥っている集落が各地で発生して来ました。それにより、山村の農地や森林は管理することが困難に陥り、山村の原風景が失われようとしています。

一方、都会は、人口が増加して消費社会は拡大し続けてきましたが、今後は人口の高齢化増加率が著しく、社会保障関連施設に入所できない高齢者はおびただしい数になると



言われています。都会と山村の人口のアンバランスは、昔も今も同じですが、これからは山村が都会を支えるという構図が現実味を帯びて来たと思います。

山村は、この視点をしっかりと見据える必要があります。都市に居住し、成熟社会の価値観多様な人々に対して、いかに山村の価値をアピールするかが戦略ではないかと思えます。また山村は、今こそ自然や豊富な再生エネルギー、かつ防災上の安全性をしっかりと確保する時だと思えます。

時ノ寿の森クラブは、それらの山村の魅力を体感してもらうような、山村体験ツアーを積極的に企画していこうと思っています。茶摘み体験もよし、陶芸体験もよし、森の読書会もよしです。

2013年5月29日(水)

世界農業遺産登録を山村再生に生かそう

生物多様性を守るために、世界農業遺産地域を認定する国連食糧農業機関（FAO）の国際会議が、今日から石川県七尾市で開催されています。会議では、国際機関幹部や各国政府高官ら約200人が持続可能な農業や社会のあり方について協議されますが、その中で静岡県掛川市で昔から続けられ現在も生かされている「茶草場農法」（茶園の土づくりのために、周辺原野に茂る草や竹笹を毎年刈り取って茶園に敷き詰める農法）が、新たに世界農業遺産に認定されました。凄いことです。



従来、我が国の世界農業遺産には「能登の里山、里海」、「佐渡の里山」が認定されていましたが、今回静岡県掛川市を含む熊本の阿蘇、大分の国東半島の3箇所が認定されました。世界農業遺産は、伝統的な農法や文化、生物多様性の継承を通じて飢餓と貧困の撲滅を目指すという目標があり、その目標を達成するためにも、農業遺産の保全への投資を官民連携して拡大することが重要だと、今回の会議でも強調されるようです。

このように、地域の自然や環境を生かし、里山や森林と共生した農業や林業は、あらゆる生物の生命やDNAが持続して行く上で、とても重要であることを国際機関が立証してくれたのです。このことは、単に茶づくりの農業だけでなく、里山と共生した農業を営む人々も、さらには山村の森林を守っている人々の活動をも称えてくれたのだと思えます。今回の掛川市世界農業遺産登録を、掛川市全体の地域づくりのあらゆる面において、行政をはじめとする市民が生かさなければならないと思います。もちろん、私たちの森林再生活動にも。

写真は、2010年11月20日に粟ヶ岳の鎮守の森を撮影に行った際、ちょうど東山地域では茶園に敷く茶草の刈り取りが真最中でした。私自身の茶園でも実践している茶園管理方法ですが、あらためてその素晴らしい風景に感動し、思わずシャッターを切ったその1枚です。

2013年6月1日(土)

セブンイレブン記念財団の地球温暖化対策

アメリカ大陸でまた巨大竜巻発生して被害が出たようです。毎日のように国内外で温暖化に伴う気候変動による異常な現象が起きています。身近では、今年の新茶の作況総括がJA掛川市から発表されましたが、3月の高温の一方で4月の低温が大きく響き、昨年比で3割以上も収穫量が減少し、最近20年間では最小であったということです。これも、温暖化による異常気象の影響です。地球温暖化対策は、もう一刻の猶予もないということ、4年前の間伐材活用シンポジウムでの基調講演で、東京大学生産技術研究所・山本良一教授から聞きましたが、昨今の国内外の動きを見ても経済優先主義が踊るばかりです。



折しも、1日から横浜でアフリカ開発会議(TIKAD5)が開催されましたが、その中で日本は今後5年間で最大3.2兆円の支援をすることを表明するようです。アフリカの人々が望まない「貧富の拡大」や「環境破壊」につながるような経済成長になってはいけないと思います。

私たちNPO法人は、7年前からふるさとの森を再生させ、豊かな姿で時代に引き継ぐことを目標として、森林再生活動をしています。その活動が評価され、昨年から3年間の予定でセブンイレブン記念財団の地球温暖化対策助成をしてもらっています。平成25年度の助成についても、昨日決定通知が届きました。セブンイレブンを利用されるお客様の協力による環境基金から支援いただいている助成ですので、地球温暖化に貢献する森林再生のために活用させていただきます。セブンイレブン記念財団様ありがとうございます。

2013年6月2日(日)

遠州灘沿岸に広がる森の防波堤づくり



今日、静岡県浜松市の海岸地域において、NPO法人縄文楽校主催による森の防波堤づくりのための植樹が開催されました。浜松市では、民間企業からの300億円と言う巨額の寄付が県に対してあり、行政ではそれにもなう防波堤づくりの研究検討がなされているようです。

しかし、どんなに巨額な寄付金による防波堤ができて、住民全員参加による

「いのちを守る」という地域共同体づくりは欠かせません。その意味において、老若男女、幼児までもが参加できる「森の防波堤づくり植樹祭」は、まさに効果的な津波からいのちを守る地域共同体づくりの最たるものだと思います。

今日の植樹祭を主催されたNPO法人縄文楽校では、昨年からは私たち掛川市の森の防波堤づくりに共鳴され、予想される東海地震により甚大な津波被害が不可避な浜松市沿岸においても、市民と行政が協働による森の防波堤づくりを進めたいと、ずっと検討が

されてきました。その熱い思いが結実し、本日第一歩がスタートしました。素晴らしいことです。遠州灘沿岸の自治体と住民が手をつなぎ、いのちを守る森の防波堤づくりを立ち上げたいものです。

今日の植樹祭には、わが時ノ寿の森クラブからも、私以外に浜松市の会員3名とその家族2名の6名が参加しました。主催者のネットワークと真摯な姿勢に賛同され、浜松市内はもとより宮城県や愛知県からも応援に駆けつけていました。

2013年6月13日(木)

震災復興の現地を見て

先週末より3日間の日程で、三陸沿岸の自治体の震災復興の現状を視察してまいりました。宮城県岩沼市及び岩手県大槌町では、首長さんの強いリーダーシップの元で、市民・企業・行政が協働し、津波から市民の生命を守るためには国による防波堤づくりだけではダメだと、市民参加の「森の防波堤づくり」が進んでいました。しかし、今回視察した一番南に位置する宮城県山元町から、一番北の岩手県山田町までの百数十キロの沿岸都市で目にした光景は、まだ到底復興と言えるものではありませんでした。



被災された行政と住民の皆さんが、復興に向けての懸命な努力をされていても、2年3ヶ月過ぎた現状がこのような状況であるという現実を目にし、あらためて被害の大きさと、そして未来のために最大多数の人々が合意した都市づくりの難しさを痛感しました。あの忌まわしい大津波の記憶に耐えながら、かつ甚大な犠牲から学んだ尊い教訓をどう活かして街を造れば、未来永劫、三陸沿岸の豊かな恵みと共生できる安心安全な都市ができるのか、三陸沿岸のすべての都市の行政の人が、住民の皆さんが考えているのです。

この視察を通じて、多くのことに気づかされました。まず大切なことは共感することだと思います。そして、その思に対して自分自身は、何をすることが一番必要なのかという生き方をしていきたいと思います。そんな矢先に、一昨日からの国の復興庁職員の言動の報道には、悲しくなってしまいました。

写真は、行政と住民の皆様が多くの議論を経て、忌まわしい記憶に耐えながらも尊い犠牲と教訓を風化させずに、未来の大槌町のために痛ましい姿の旧庁舎をモニュメント化して残すことにしたそうです。

2013年6月18日(火)

山村と都市が支え合う好事例

7年前に廃村跡からスタートした森林再生活動です。この間、時ノ寿の森クラブが実施した源流域の荒廃森林の間伐面積は160haを超え、また源流域の間伐跡や松枯れ著しい海岸防災林、病院など公共施設へ植樹した広葉樹の本数は6万本を超えました。

一昨年の東日本大震災や紀伊半島大水害以降、安全安心な都市づくりを目指した森づくりに社会の関心は高まっていますが、とりわけ森林が市の面積の半分に達する掛川市

は、市民と行政が協働により行うべき、最も実効性の高い社会課題と言えるのではないのでしょうか。

まだ私たちの活動は、緒に就いたばかりですが、そのような意味において、広く社会全体の参加によって森林の持つ公益的機能が守られていかなければならないと思います。しかし、人口の高齢化・減少時代の中で、荒廃する山村や里山を保全していくことは容易なことではありません。これからは、生物多様性など山村の持っている多くのポテンシャルが、社会（特に都市）から評価・見直され、その結果として山村に経済的リターンが生まれるような、山村と都市が支え合うシステムづくりが不可欠だと思います。



先日、そのような考え方に立脚した素晴らしい活動により、里地・里山の生物多様性が守られている「まほろば」のような地域を見て来ました。その地域とは、岩手県一関市にある久保川上流の萩荘地域です。活動団体は「久保川イーハトーブ自然再生研究所」といいます。代表の千坂げんぼう氏は、宗教法人知勝院の住職ですが、この地域の豊かな自然環境を後世に伝えるため、1999年から樹木葬墓地を中心に久保川流域の自然環境整備を行ってきました。ため池群、水田、用水路、河川の調和は、とても素晴らしく見事な景観でした。

千坂さんから多くのお話を伺い、また氏が20年間活動されてきた地域を案内していただき、私たち時ノ寿の森クラブの理念や活動の方向性が間違っていないと確信しました。そして、これからは「時ノ寿の森」の生物多様性を守る活動に、一層の努力と工夫が大切だと自覚を強くしました。

2013年6月19日(水)

木質バイオマス時代

東日本大震災、それに伴う人災とも言われる過酷な原発事故で壊滅的な被害を受けた日本を、世界各国が案じてくれました。小さな島国の中で、福島県のほかにもう一つ原発事故が起こったら、1億人の日本人はいったいどこに逃げるのでしょうか。そんな深刻な事態に陥りかねない状況に置かれていながら、のど元過ぎれば・・・、と言われるが如くの状態です。未来を見据えた本気の再生エネルギー政策をしてほしいものです。



高齢化、人口減少時代の中で、私たちの遺伝子を未来につなげていくために不可欠な生物多様性に富んだ里地里山を守っていくには、地域資源である森林をエネルギーとして捉えた地域産業を起業することが重要です。行政のみならず、国はもちろん企業としても大事な使命であると思います。本日、静岡県牧之原市において、木質バイオマス利用によるエネルギー産業の起業を本気に考える会がありました。牧之原市長の熱い思いに、産官学の関係者たちが地元をはじめ東京や北海道、福島県からも総勢30人が集まり、

夢物語ではない本気の議論をしました。

その席へ牧之原市長からご案内をいただき、参加させていただきました。国内トップクラスのバイオマス技術者、また140万世帯の消費者を会員として有しかつ灯油年間1億ℓの国内最大販売業者でもある社長、さらには原発事故で大事な森林産業に危機感を抱いている福島県林業関係者など、木質バイオマスエネルギー産業への真剣な皆様の姿勢に心を動かされました。

福島県の林業関係者Mさんが、自らの経験に基づいて私に言ってくれた言葉は、私の気持ちを勇気づけ、示唆もしてくれました。「もはや個人所有者では維持管理することが出来なくなってしまった小規模森林を、これから本気に守っていききたいと思うなら、あなたの法人が森林を所有していき、あなた自身が林業家として成功しなければダメです。今までやってきたことは、目的達成のためにはロスが多過ぎます。それではあなた自身も疲弊してしまいますが、家族からも理解されません。そして、未来永劫、森林再生は持続して行かないと思いますよ」と。

2013年6月25日(火)

若者の感性



最近、若者の素直な感性や言動に好感を抱き、心地よいひとときを味わうことがしばしばあります。年齢を重ねるとどうしても過去の経験や浅い知識が邪魔をしてしまい、自分の素直な気持ちに沿った言動が表わせないときがあります。そんな思いが頭をよぎるのは、もうじき還暦を迎える私だけでしょうか。

我が家の若夫婦を見ている、先日の刻字を初体験する若手書道家や愛好者を見ても、昨日・今日開かれた地方議会の若手

新人議員の一般質問を見ても、そう感じました。

家庭、地域、学校、会社、行政、政治、外交など社会のあらゆる場面において、老練な大人たちは、若い世代の感性が捉えた意見や感想を大事に聞いてやる耳を持ちたいものだと思いました。一方、若者たちは、その感性をいつまでも曇らせることなく、そして常に謙虚さと学習することを忘れずに、老練な大人たちの下で安心して、勇気と希望を持って、大いに挑戦をしてもらいたいものです。

今日の日本社会には、地域にも家庭にも、都市にも地方にも、企業にも国家にも、そんな風土が一番必要なのではないかと思いました。

写真は、自分の好きな字「真」「心」「輝」「歩」「峻巖」「澄懷」等々を書き、それを無心にノミで刻む若者たち。いい景色です。

2013年6月28日(金)

草刈り十字軍に参加しよう

掛川市の月刊広報紙7月号が発行されました。その15ページに、わが時ノ寿の森クラブが主体となり、行政・企業と協働して始めた「希望の森づくりプロジェクト」が、

ますます多くの市民や企業の支援によって発展していくことを期待する特集記事が掲載されています。

昨日のブログでも、森づくりは植樹したら終わりではなく、苗木が自立するためには、植樹して概ね4年くらいの間は下草刈りなどの育樹活動が必要だと書きました。



多くの市民のみなさんが、広報かけがわ7月号をご覧になり、今夏予定している「希望の森」の下草刈りにご参加いただきたいと思います。暑い季節での楽な作業ではありませんが、可愛い苗木の成長を妨害する生命力旺盛な雑草を取り除いたり、雑草を刈り取ってもらうという「正義」の活動です。

雑草には申し訳ないけれど、苗木の成長を助けるために雑草と奮闘してもらうという意味から、この活動を「希望の森・草刈り十字軍」と名づけることとしました。ご承知のとおり、十字軍とは、11世紀から13世紀ころにかけ、ヨーロッパで起きた宗教戦争です。

どうぞみなさん、愛する人や未来の子供たちの「いのち」を守る森づくりのために、この「十字軍」に参加してください。